

隨泉寺寺報

2002 年 6 月号 第382号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

夏季門信徒講座

講師 吳 阿賀 西光寺住職

藤瀬 弘樹師

講題「ご恩うれしや南無阿弥陀仏」

サッカーのワールドカップが始まりました。フランスチームのキャプテン、ジダンが二十世紀を代表する名プレイヤーのひとりといわれる。前回フランス大会の優勝の立役者である。彼の豪快なヘッドシュートとボレーのシュートは有名だけれども、彼の一番の持ち味は的確な状況判断と味方に出すスルーパスである。これは自分自身が目立つというよりも、相手を信頼して、自分を捨てる所に、技術があるのである。8年前のフランスは予選で敗退してしまった。その時にフランスにはとてもちからのある選手が揃っていたけれども、個人個人がばらばらで、一つにまとまりきれなかった。だから四年前は、技術は二の次でチームをまとめる事が出来る人が必要であったのである。サッカーは11人でするスポーツである。マラドーナも、プラティニも、ペレも、一人では勝てない。仲間を信頼して自分を捨てる。一人は10人のために、10人はひとりのために。ジダンはその意味で適任だった。二十一世紀のサッカーはどんなスーパースターを生むのだろう。しかし決して一人の力で優勝は出来ないだろう。

6月の行事予定

6月 8日 昼席午前10時より……安芸北組中ブロック若婦人研修会

6月14日 昼席午後1時より……門信徒講座

6月14日 夜席午後8時より……出張法座 桑原 桑原克延氏宅

6月15日 朝席午前10時より……門信徒講座

6月15日 昼席午後 1時より……門信徒講座

百ヶ日を迎えて

平成14年4月
祭田 学

深い悲しみに包まれた今年の12月2日。その日はあまりにも突然に訪れました。父はそれまで、重い病気に冒されていたにも関わらず、家族や回りの者に、不安や苦しみのかけらも見せず過ごしていました。それだけに、その日は信じ難く、まるで映画のワンシンのように、現実とかけ離れたことのように感じました。葬儀を終え、初七日・四十九日など一つ一つの法要を終えて、先日百ヶ日を迎えるに至りました。この機をとらえて、生前の父との思い出を、振り返ってみました。

天真爛漫という言葉がありますが、父は正にこの世界を我が思いのまま楽しく生き抜いた一人だと思います。人間ですから不安や悲しみ・苦しみなど数多くあったことと思います。が、そんなことは微塵ももせず、絶えず明るく振る舞う人でした。お酒が好きで人が好きな性格は、父の周りに人を集めました。人間社会のしがらみの中で、傷ついたり愚痴を言ったりしたくなることもあったでしょうが、父は自分からそのようなことを言うことはほとんどなく、周りには元気を与えていたのではないかと思います。

父は私に次のようなことをよく言いました。「悲しい酒は飲んでもだめ。愚痴を言って飲んでもだめ。同じ飲むなら楽しい酒を飲まんといけん。」人と人との間で生きて行くから人間です。その社会の中で生きる息子たちに、父は自分が生きてきた人生を振り返り伝えてくれたのだと思います。

わたしたちはこの世に生かされており、その与えられた命の中で、自分自身が何を大切に生きていけばよいのかを選択できます。自分で納得した生き方はなかなかできるものではないと思いますが、父から学んだことを胸に、一日一日を大切に過ごし日々精進していきたいと思えます。

末筆ながら、父の死に際してお世話になりました隨泉寺住職様をはじめ、多くの方々に感謝申し上げます。

合掌

私は死ぬまで煩惱具足の凡夫です

清胤 徹昭（きよたね てつしょう）

1930年、広島県生まれ

『「歎異抄」を仰いで』（本願寺出版社）より

[法話]

聖人の悲しみ

親鸞聖人は九十年の生涯でした。当時の平均寿命は、おそらく三十歳もなかったといわれる時代の九十年でした。たいへんなことだったろうと思います。それにもまして、聖人の生涯には最後までさまざまなことが起こります。

六十歳を過ぎてからご家族で関東から京都へ戻られるのですが、晩年を夫婦で一緒に過ごされたわけではありません。妻の恵心尼（えしんに）さまは越後（えちご）へ帰っていかれるのです。どのような事情があったのでしょうか。ともかくも、年老いた聖人を京へ残していかねばならないほどのわけがあったに違いありません。聖人の最期を看取ったのは妻の恵心尼さまではなくて、末娘の覚信尼（かくしんに）さまでした。

また、八十四歳の時には悲しい事件が聖人をおそいます。息子の善鸞（ぜんらん）さまを義絶しなければならなかったことです。最晩年になって親子の縁を切らねばなりませんでした。善鸞さまは聖人からの命を受けて関東に行かれたに違いありませんが、聖人が言われたこととは違う教えを説き、関東の念仏の同行（どうぎょう）を混乱させました。



これが言えるしあわせ

聖人はご和讃の中で「是非（ぜひ）しらず邪正（じゃしょう）もわかぬ このみなり少慈少悲（しょうじしょうひ）もなけれども名利（みょうり）に人師を（にんし）をこのむなり」（註釈版聖典622頁）とご自身のことを述べられます。

関東からの便りでは、息子の善鸞さまが間違っただけを言っているという情報は早くから届いていたことでしょう。けれども、まさかという思いがあり、すぐには信じがたいものでした。もっと早く適切な処置をしていれば、息子を義絶するような、念仏の仲間から追い出してしまうようなことをせずすんだらうにと、悔やまれたことでしょう。京都で「お師匠さま、先生」といわれていい気になって、入ってくる情報を何が正しくて何が間違っているのか、見分ける力もなく、とうとう息子一人を救うことができなかつたと泣かれた言葉です。「少慈少悲」とは仏さまの大慈大悲に比べる言葉です。人間の慈悲というものですが、それさえもないと泣かれました。このときほど、自信は凡夫であると思ひ知らされたことはないでしょう。

ところがその聖人は、八十五歳の時に「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし 師主知識（ししゅちしき）の恩徳もほねをくだきても謝すべし」（註釈版聖典610頁）という有名な恩徳讃（おんどくさん）を作られました。八十五歳の老人が、私は生命を捨ててもお礼をし尽くすことができなほどの、大きな大きな幸せをいただいたと喜ばれた言葉です。聖人にとって、わが子さえも救えない凡夫であることをいやと言うほど知らされることは、お念仏に出遭（であ）えたことにほかなりませんでした。

武田 達城（たけだ たつじょう）

大阪・千里寺

